

『2013年武漢の旅』
~2013年 武漢大学留学 報告書~
March 1st – April 6th, 2013



4/4、大学の正門にて、集合写真

m09105 安藤匠平

1. はじめに

2013年3月1日から4月6日にかけて、中国は湖北省武漢市にある武漢大学に留学して参りました、福島医大医学部5年の安藤匠平です。

武漢は直線距離にして上海から西に約600 km、李白の漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」で有名な「黄鶴楼」を有する街で、三国志で有名な「赤壁」にもほど近いところです（それでも100 kmほど離れていますが、中国的には「近い」距離のようです）。



3/9、黄鶴楼にて、真下から見上げる

武漢大学は1893年に創立した中国で最も歴史がある大学の一つで、医学部は2000年に湖北医科大学との合併で生まれました。そのため、医学部キャンパスはメインキャンパスからやや離れており、徒歩で30分ほどの場所にあります。福島医大と武漢大学の交流は1996年、つまり湖北医科大学の時代から続いています。

さて、中国には、“English name”という名前をお持ちの方がいらっしゃいます。これは中国の方が外国人に対して名乗る名前のことで、発音が難しい中国語の名前に比べて簡単な名前を使うことで、コミュニケーションを円滑にしているのだそうです。

私も中国ではこれに倣い、“Andoh”改め“Andy”という名前で生活してきました。今回は、“Andy”として過ごした武漢での日々を振り返り、そこで感じたことを記していきたいと思います。

2. 大学生活

滞在中は、福島医大における「基礎上級（＝学生が基礎系の講座に1ヶ月程度配属され、研究について学ぶ実習）」を武漢大学において実施するため、4人の学生がそれぞれ別の教室に配属されての生活となりました。

私が配属されたのは「基礎医学院」の「生物化学与分子生物学系」講座、「張百芳」先生（Prof. Zhang）の教室でした。張先生は主に糖尿病性腎症とシグナル伝達の研究をされている女性研究者であり、英語が大変堪能で、後述する留学生クラスの授業も受け持っておられました。教室には他に二人の女性がおり、二人とも英語はそれほど得意ではないものの、大変に気を配って頂き、不自由のない生活を送ることができました。



4/3、farewell party にて、Prof. Zhang と



3/6、キャンパスにて、教室の二人と

日々の生活ですが、平日は朝9時から夜10時ごろまで研究室にいるようにし、土日は完全にお休みを頂いていました。

研究室では自分のデスクが与えられ、持ちこんだパソコンを自由に使うことができました。ここではほぼ毎日のように細胞培養と western blot が行われており、これらを見学したり実際に手技を手伝ったりしました。両者に関して日本にいる間に手ほどきを受けていたため、英語での説明が十分でなくとも手技を理解することができたのは幸いでした。手技に関しては、当然とも言えますが日本とほとんど変わらない印象を受けました。ただ一方で、実験に用いる水をガラスのタンクから供給していたこと（蒸留水だと思われます）にはやや驚きました。



3/13、研究室にて、与えられたデスク



3/13、研究室にて、室内の様子

およそ週に 1 回程度、論文の抄読会が開かれ、特に糖尿病性腎症の動物モデルに関する英語の論文を 1 時間ほどかけて討論しました。議論が白熱すると中国語になってしまうこともありましたが、**Prof. Zhang** がかなり気を使って英訳と要約をして下さったため、内容についていくことができました。

また、週に 2 回、外国人留学生を対象とした生化学の講義（これは全編英語で行われます）に出席しました。日本でも有名な『ハーパー生化学』を教科書とし、1 回 2 時間ほどの講義で 1 章程度ずつ進んでいきました。これについても、日程上、取り扱う範囲の山場が 2 年生の時にたまたま英語で覚えていた糖代謝の範囲だったことから、何とか食らいつくことができました。出席確認用の名簿を見せてもらった印象では留学生のほとんどがインド出身で、他にカナダやシンガポール、韓国などからの学生がわずかにいました。留学生たちは非常にフレンドリーで、講義の前後（あるいは講義中にさえ）声をかけてくれました。講義に際しては概して日本よりレスポンスがよく、かなり熱心に聞いている学生もいる一方で、講義中の私語が目立ち、またゲームや他の科目の内職をする学生などもおり、そこは日本と変わらないようでした。休み時間には折り紙で鶴を作ってみせると大変喜んでくれ、以来会うたびに折り鶴を頼まれるようになりました。



3/8、講義にて、授業風景



3/8、講義にて、出席確認に賑わう

以上が **routine** の内容であります。その他に大学病院の見学をさせて頂いたのと、武漢大学の学生との交流会とがありました。

大学病院の見学は、後述する王先生と梅先生、さらに王先生の奥様の協力の下、中南医院（主に神経内科、梅先生が勤務）、人民医院（主に精神科、王先生の奥様が勤務）を訪れました。病院の規模としては、中南医院は病床数 2,000 床、人民医院は 3,000 床ほどあり、いくつもの別な建物からなるなど、日本とのスケールの違いを感じました。

梅先生は医学部キャンパスに隣接した中南医院に勤務されており、2009 年に建てられたという病院の中はほとんど日本と変わらない清潔な印象を受けました。神経内科の病床は 120 床、**stroke unit** だけでも 12 床あるとのことでした。



3/20、中南医院見学にて、**Stroke unit**



3/20、中南医院見学にて、装飾

王先生の奥様は医学部のキャンパスからやや離れた（黄鶴楼に近い）人民医院に勤務されていました。奥様が勤務されている精神科の女性病棟を見学しましたが、かなりお忙しいようでした。その後も院内を見学しましたが、中南医院同様に清潔な印象を受けました。



3/20、人民病院見学にて、外観



3/20、人民病院見学にて、院内

交流会で私たちは福島、福島医大、東日本大震災、医学教育制度についてプレゼンをしました。私は医学教育制度をテーマに発表しましたが、ディスカッションを通じて、中国では概して医師国家試験の合格率が日本よりずっと低いということ、学部卒業後に職を見つけるのは容易ではないということ、良い職を得るためには学位を取得する必要があるということなどを学びました。また中国の医学部は5年制であり、日本では6年で「学士」だということに大変驚かれました。討論を通じて日本と中国の医学生が置かれた状況の違いをお互いに理解することができました。

交流会では他に、武漢大学の学生から武漢についての紹介がありました。英語が得意な学生が選抜されたようで、非常に流暢な英語でした。彼らの発表を通して、食べたことがない料理、行ったことのない場所をたくさん教えてもらいましたが、交流会後に残された日数が少なく、そのほとんどを経験できなかったことは残念でした。



4/1、交流会にて、先生方と



4/1、交流会にて、学生同士で

フリーディスカッションの時間には、参加していた多くの学生と話し、日本のマンガやアニメが中国でも想像以上に人気であることを知りました。また、それらを通じて日本に興味を持ち、日本語を学んでいる学生もいるようでした。ここでも新たな出会いが多く、より早い時期にこの企画が開催されていればと思いました。

この交流会は非常に有意義なものであったと思います。というのも、日本と中国は政治的には今もって非常に複雑な問題を抱えています。学生同士で話していてそういった軋轢を感じることは全くなかったためです。国と国の問題、人と人の問題は全く異なることを実感でき、後述するようなコミュニケーションの重要性を強く感じました。

3. 日常生活

滞在中は大学内の宿泊施設「双湖園迎賓楼」に宿泊していました。中国の友人が言うには“respectable guests”のための施設らしく、通常学生は立ち入る機会がないそうで、そこに滞在しているということに大変驚かれました。

室内はフローリングで、ツインベッドに加えて冷蔵庫、エアコン、テレビ、電気ケトルなどが備わっていました。部屋には室内履き用のサンダルが置いてあったため、部屋に帰った後はリラックスして過ごすことができました。滞在中は気温の変化が激しく、最高気温が30℃になろうかという日もあれば最低気温が0℃に近い日もあったため、エアコンが自由に使えたことは非常に助かりました。また、洗濯物を乾かす際にも重宝しました。コンセントプラグは日本同様のA型、またO型が使用可能でした。

そのほか室内にはクローゼットと、洗面台、トイレ、シャワーがありました。洗面台は排水管に見える範囲でトラップがなかった（管がまっすぐ下に伸びていた）ことが特徴的でした。トイレは洋式でしたが、紙は流さず隣のごみ箱に捨てておくというものでした。シャワーは時間を問わずいつでも使うことができたため、快適な生活を送ることができました。

洗濯機は自室内にはなく共用であったため、他の利用者が終わるのを待つこともしばしばありました。洗濯物を干す場所が分からず、部屋干しをしなくてはいけないことで乾かすのに時間がかかるなど、やや苦労もありました。

また施設内にはWi-Fi環境があったため、インターネットの利用も可能でしたが、部屋によって、また同じ室内でも場所によって接続状況はまちまちでした。



3/7、双湖園迎賓楼にて、玄関前



3/1、自室にて、実際は写真より暗い

キャンパス内には売店がいくつもあり、スナック類、ビールを含む飲み物、生活用品などを揃えることができました。店のおばさんはもちろん英語を話すことができず中国語でのやり取りなので、初めのうちは値段すら聞き取ることができずに苦勞しました。余談ですが、中国では小額紙幣（1元から）が使用されているため、その扱いについてはやや雑な印象を受けました。

食堂は宿泊施設の両隣にあったため便利でした。「学生一食堂」はカード制で、別途カードにお金をチャージし、それで会計をしました。正規の学生でない私たちはカードを持たないため、滞在中それぞれ先生からカードお借りしていました。ご飯が100gあたり0.2元（とはいえ200gないし300gで対応されます）、料理は種類によって1-5元ほどで、食べたい料理を指差せば渡してくれるため、中国語を解さない私たちでも安心でした。毎回の食事はほとんどの場合10元以下でした。「来华餐厅」は現金制なのですが、料理の注文や受け渡しが口頭であるため、筆談で注文できたとしても受け取る際に料理の名前を聞き取ることができず、自分の頼んだ料理ができたことが分からないこともありました。



3/7、学生一食堂、カード制で量り売り



3/7、来华餐厅、現金制



3/13、学生一食堂にて、昼食



3/3、来华餐厅にて、夕食

街の交通に関して、中国は右側通行なのですが、「赤信号でも右折することができる」らしく、慣れないうちは何度となく轢かれかけました。車道は多くの場合片側 2 車線以上あるため、信号がない横断歩道などで道路を渡る際には一度中央で待つ必要がありました。ハイブリット車や電気自動車を見かけることは極めて稀でしたが、逆に日本では見かけない電動バイクが非常に多く走っていました。これらの盗難防止用の警報装置の音はけたたましく、夜半しばしばその音に驚かされました。



3/6、キャンパスにて、充電中の電動バイク



3/9、キャンパスにて、充電中の電動バイク

また、日本で出国前から（滞在中、また現在まで）かなり話題となっていた大気汚染についてですが、下の写真から分かるように日中は遠くの景色がぼやけて見え、夜になっても光が乱反射するためか薄明るいままでした。武漢は更なる発展に向けて建築中の建物が多く、それも大気汚染の一因になっているようです。街中でマスクをしていたのは（電動）バイクに乗った人々くらいで、一般に街を歩く人々がマスクをしている姿などはあまり見受けられませんでした。私たちがマスクをしていると「風邪を引いたの？」と心配させてしまうため、日本から持って行ったマスクはほとんど使わずに終わりました。



3/20、武漢市内にて、遠くの建物が霞む



3/8、キャンパス内にて、夜空が薄明るい

4. 交友関係

昨年秋に武漢大学から福島医大にいらしていた Dr. Wang (王得志 先生)、Dr. Mei (梅斌 先生) には滞在中を通して助けて頂きました。お二人には個人的に welcome また farewell party を開いて頂いたり、大学病院の見学をさせて頂いたりし、また世界遺産『武当山』への旅行を手配して頂くなど、公私に渡って大変お世話になりました。また王先生は携帯電話のカード購入や街への生活用品の買い出しなど、親身になって私たちのことを案じて下さいました。何かと不安も多い滞在中、先生のお心遣いが本当にありがたかったです。



3/4、private welcome party にて、王先生(左)と梅先生(右)



3/4、private welcome party にて



4/3、private farewell party にて

他にも Dr. Liu (刘昱 先生、上の写真中の女性) など、日本あるいは福島医大に縁のある先生方にもお会いすることができ、私たちの滞在を支えて頂いたことは非常に心強かったです。

多くの友人に恵まれたことも今回の留学の収穫であったと思います。お互いのことや日本と中国についての話をしたり、バドミントン、サッカーなどスポーツを楽しんだり、メインキャンパス、黄鶴楼、長江、お花見、博物館、映画館、武当山、漢口、動物園、他にも様々な場所に連れて行ってもらったりするなどして、本当に楽しい時間を過ごすことができました。



3/22、十堰市にて、武当山旅行中



3/23、武当山にて



3/14、メインキャンパスにて、花見後



4/4、体育館にて、バドミントン後



3/29、武漢動物園にて、観光後



4/4、学生寮にて、夕食後

5. 武漢の所感

武漢での生活を通して、いくつか感じたことをまとめておきたいと思います。

人の集まる場所、例えば街のフードコートや公園などでは、あまり好ましい表現ではありませんが、beggar に遭遇することが幾度もありました。私が 1 番驚いたのは、街のフードコートで突然私たちのテーブルの上のラーメンに口をつけられ、さらにお金を乞われた時でした。また別な日には、一食の間に三度も同様にお金を乞われたことがありました。同様のことは、帰国の際利用した上海の地下鉄の中でもあり、disability を持った方が乗客からお金を乞うていました。門外漢である私が論じるのも恐縮ですが、これらの体験から中国の社会保障制度が不十分であろうことをありありと感じ、大気汚染などの環境問題同様、経済規模をますます発展させる中国がこれから解決していかなければならない大きな課題であるように思いました。

日々の生活で感じたのは、「英語は道具でしかない」ということでした。いくら英語が重要だと言っても、物事を考える力や伝える中身が無ければ言葉が話せないのと同義です。何かを伝えたいと思うこと、そのために物事をよく考えることが重要であると感じました。例を挙げれば、花見の途中テレビ局に取材を受けた際、「日本人はなぜ桜を見るのですか？」という問いに対して答えに詰まっしまい、気まずい思いをしました。また政治的な内容はなるべく避けたかったのですが、これについても中国の学生は圧倒的な知識を持っており、しかもそれについて英語で議論することができていました。中国の学生の中には日本人以上に日本の文化に詳しい人も多く、実は私たち日本人が一番日本を知らないかもしれない、ということを感じました。

学生生活に対する意識も日中で大きく異なっていました（余談ですが、中国では”日中”ではなく”中日”と表記されていました）。ある友人の高校時代は、朝 7:00 から 22:00 ごろまで授業があり、休みは月に 2 日、部活動などはもちろんなかったという話でした。また、日本語を専攻している友人は、「日本語ができる中国人ならたくさんいるから、日本語で経営学も学んでいる」と言っていました。また、日本語を含め 6,7 ヶ国語を話せるという友人は、将来は日本の製薬企業に就職したいという夢を具体的に持っていました。中国の学生からは日本の学生にはないハングリー精神を強く感じました。「配られたカード」がたまたまよかったことに甘んじていては、これからの日本は競争力を失ってしまいます。前述の内容に戻るのですが、学生時代という時間的に恵まれた期間を十分に利用して、日本のことを知り、世界のことを知ること、将来を見据えながら日々の生活を送ることが、世界と競い合っていくために我々に求められることだと思いました。

6. おわりに

中国で過ごした 1 ヶ月有余日は、ここには書ききれないほど密度の濃いものでした。今回の経験を通じて強く感じたのは、コミュニケーションの重要性です。人と人には、必ず誤解が生じます。日本人同士でさえ生じるものが、外国人との間に生じないはずがありません。ここには書くことすら憚られるような、荒唐無稽な日本に対する誤解を中国の学生から聞かされた時、馬鹿げていると笑い飛ばしましたが、翻って私たちが中国に対して誤解していることは本当はないのか、と不安になりました。対話を通じてお互いに誤解を明らかにし、それを解消していくことが、友好関係を築くために不可欠だということを強く感じました。

海外に身を置くことで、日本という国を客観的に顧みることができ、今まで気がつかなかった問題点にも気がつくと同時に日本の良さを実感することができました。また、海外に身を置けば「自分が日本人である」ということが強烈なアイデンティティとして眼前に迫ることも感じ、日本についてもっと深い知識を得、それを世界に伝えられるようになりたいと思うようになりました。

最後になりましたが、今回の留学に当たりご尽力頂いた理事長兼学長の菊地先生、衛生学・予防医学講座の福島先生、学生課ならびに企画財務課の皆様、武漢大学の Dr. Wang (王先生)、Dr. Mei (梅先生)、Prof. Zhang (張先生)、Ms. “Daisy” を初めとする関係の皆様には厚く御礼申し上げます、結びの言葉と致します。

平成 25 年 5 月 10 日
福島県立医科大学 医学部医学科
安藤匠平 “Andy”